

ロビン・フッドと修道士

1 夏の木の緑は輝くばかり
葉は大きく伸びやかに
森を歩けば

鳥のさえずりはなんとも楽し

2 鹿が高い丘を下っては

谷間に向かって降りてゆき

緑に茂る木の下で

青葉にとけて姿が消える

3 聖霊降臨祭の頃のこと

五月の朝は白々と

高みからさす陽の光

鳥たちは楽しげに歌うたう

4 「なんとも陽気な朝ですな

キリスト様の御名にかけて

このわたしより陽気な男など

この国にはおりますまい

5 「お頭かしら さあお楽しみなされ

今日の朝は

なんとも美しいではありませんか

とリトル・ジョンが言いました

6 ロビン・フッドが応えて言いました

「あることがこの心を苦しめておる

このままではミサにも朝の祈りにも

行く気にはなれぬのだ

7 「最後にミサで祈りをささげたのは

もう二週間以上も前のこと

わしは今日 ノッティンガムへ行く

お優しきマリア様のお力を借りて」

8 すると粉屋の息子のマッチが言いました

この男に幸運がありますように

「どうか武装した屈強な手下を十二人

共にお連れくだされませ
十二人の手下なしでは

自ら命を危険にさらされるも同じこと」

9 「手下はあまたあれど

この者ひとりで十分だ

リトル・ジョンをおいて他に

この弓を持たせる者はない」

10 「どうぞご自身でお持ちなされ

わしにはわしの弓がござる

あの緑の森の中で

一ペニー賭けて勝負いたしましょう」

11 「賭けなどせぬぞ」とロビン・フッド

「お前とは決して勝負などせぬわ

それでもどうしても言うのであれば

わしは三ペニー賭けようぞ」

12 こうして二人のヨーマンは

シダの茂みで矢を放ちました

リトル・ジョンが勝ちました

五シリングの完勝でした

13 それで二人は道すがら

激しく諍いざこざったのでした

五シリング求めるリトル・ジョンに

「否」ロビンはすかさず言いました

14 言うが早いかロビンはジョンにのしかかり

拳で殴りつけました

ジョンはこれに腹を立て

輝く剣を抜きました

15 「もうお前など主人ではないわ

このわしを殴るとは

誰か別の者をお連れなされ

わしはもう ご免こうむる」

16 朝になるとロビンはノッティンガムへ

一人で出かけてゆきました

リトル・ジョンは陽気なシャーウッドの森へ

勝手知ったる道に戻ってゆきました

17 ノッティンガムへやってくる

神妙にもロビンは

神様とお優しいきマリア様にお祈りしました

無事シャーウッドへと戻るように

18 ロビンは聖メアリ教会へゆきました

そして十字架の前に跪すまきました

教会に居合わせたすべての者が

ロビン・フッドの姿を見ました

19 ロビンの横に白髪の修道士が立っていました

神よ なんとということでしょう

修道士には一目でそれが

ロビン・フッドだと分かったのです

20 修道士は一目散に

扉に向かって走りました

ノッティンガムの出口のすべてを

修道士は固く閉めさせました

21 「起きて下さい お代官様

すぐにご用意なさいませ

王様に楯つく悪党を

この町の中で見つけました

22 「この目でしかと見たのです

あの悪党がわたしのミサに

早くご用意なさいませ

あの悪党を逃さぬように

23 「悪党の名はロビン・フッド

リンデンの木の下に知られるその名前

わたしから百ポンド奪ったその男

ゆめゆめ忘れはいたしません」

24 すると代官は起き上がり

急いで支度を整えました

部下のだけれもが

代官とともに教会に向かいました

25 教会の扉を激しく押し開けました

大勢の者たちが棒でこじ開けました

「なんたることだ こんなことなら

ジョンを連れてくるのだった」

26 しかしロビンは腰に下げた

諸手であやつる剣をとり

代官とぞろりと集まったその部下たちに

単身突入したのでした

27 群がる敵に三たび切りこみ

信じ難いとお思いでしょうが

多くの者が傷を負いました

この日ロビンは殺したのは十二人

28 代官の頭に振り下ろしたロビンの剣が

真っ二つに折れました

「おのれ 鍛冶屋め

神の災い受けるがいい

29 「これで丸腰

ああ 無念

こやつらから逃げようとすれば

きっとわしは殺られるだろう」

30 ロビンは教会の中に駆け戻りました

代官たちは寄ってたかってロビンを

・
・
・
・
・
・

31 知らせを聞いたロビンの手下は

茫然自失 石のように立ち尽くしました

皆が正気を失う中で

リトル・ジョンだけは冷静でした

32 「いつも通り動けばよい

キリスト様をただ信じよ

豪胆無比なお前たちの不様な姿なぞ

見るも不面目

33 「お頭はどんな窮地からも

いつも脱してこられたではないか

元気を出せ 嘆くを止めて

わしの言うことを聞け

34 「お頭はいつもマリア様に祈っておられた

このたびも祈られたはず

だからわしはその恩寵を信じる

お頭がひどい死に方などなさるはずがない

35 「心配はいらん

嘆くを止めよ

お優しいマリア様のお力をかりて

修道士の始末はわしが引き受けよう

36

「ただし ゆくのはわしら二人

わしが直に会ってくる

.

37 「緑の葉に覆われた

約束の木をしかと守るのだ

この谷をゆく鹿は

一頭たりとも逃がすでないぞ」

38 こうしてリトル・ジョンは

マッチだけを伴って

マッチの叔父の家から

近くの通りを見張っていました

39 朝になるとジョンは窓のそばに立ち

舞台となるべき通りを見張っていると

あの修道士が馬に乗り

小姓を一人連れてやってくるのが見えました

40 ジョンがマツチに言いました

「これはしめしめ

あちらからやってくる修道士

あのつば広の帽子 間違いない」

41 二人は通りに飛び出しました

礼を尽くして 威厳をもって

そしていかにも親しげに

修道士に挨拶したのでした

42 「どこから来られた」とリトル・ジョン

「うわさによると かの極悪の無法者

(とロビンのことをこう呼んで)

昨日召し捕られたそうではござらぬか

43 「あの悪党め わしらから

二十マークもの金を盗みよった

もし本当にあの無法者が捕まったのなら

わしらにとってもそれは吉報」

44 「わたしも難にあったのだ」と修道士

「百ポンドあまりも盗まれた

やつを捕えたのはこのわたし

わたしに感謝するがいい」

45 「ああ神よ 感謝します」とリトル・ジョン

「わしらもご一緒してはなりませんか

もしもお伴がかなうのならば

道案内をいたしましょう

46 「なにせあのロビンには 荒くれ者の手下が

ごまんといると聞いております

このままこの道を進まれるなら

きつと命を落としましょうぞ」

47 修道士とリトル・ジョンは

道みち話をしていましたが
突然リトル・ジョンが

修道士の乗った馬の頭をつかみました

48 修道士の乗った馬の頭をつかみ

信じ難いとお思いでしょうが

マツチは小姓に手をかけました

逃げる間ありません

49 ジョンは修道士の帽子の首ひもをつかんで

馬から引きずりおろしました

容赦なく引いたので

修道士は頭からまっ逆さまに落ちました

50 リトル・ジョンは心底腹を立てていたので

剣を高々と振り上げました

修道士は命惜しさに

大声出して懇願しました

51 「貴様が陥れたのは」とリトル・ジョン

「ロビン・フツド わしの頭よ

もう一度と王様に

告げ口することは許さぬぞ」

52 ジョンは修道士の頭を打ちました

修道士はもう助かりません

マツチは小姓を殺しました

小姓の口を封じるために

53 二人が死体を埋めたのは

苔もヒースも生えないところ

ジョンとマツチは連れだって

王への手紙を持ってゆきました

54
ジョンは跪きました

「王様に神のご慈悲を

王様にキリスト様のご慈悲を

55 「我らが王に神のご慈悲を」

ジョンは堂々とそう言うと言
手紙を王に手渡しました

王は手紙を開きました

56 王はすぐに手紙を読むと 言いました

「今までこの陽気なイングランドで
これほどまでに会ってみたいと思った

ヨーマンは他にない

57 「して この手紙を持って参った

修道士はどこにいる」

「おそれながら」とリトル・ジョン

「修道士は道中亡くなりました」

58 王はリトル・ジョンとマッチに

二十ポンドの褒美をくださいました

二人を王に仕えるヨーマンに任じ

使者として戻るよう命じました

59 王はジョンに印章を押した信書を手渡し

代官のもとに届けるよう言いました

傷一つつけずにロビン・フッドを

王のもとに連れてくるよう

60 ジョンは王に辞去を告げました

信じ難いとお思いでしょうが

こうしてジョンはノッティンガムへと

向かって出立したのでした

61 ジョンがノッティンガムへやってくると

町の門はしっかと門がかかっていました

ジョンは門番を呼びました

門番はすぐに返事をしました

62 「いかなるわけで

このようにしっかと門がかかっている」

「それはロビン・フッドが

牢獄深く投げ込まれているからです

63 「ジョンとマッチとウィル・スカーレットが

信じ難いとお思いでしょうが

我らの仲間を殺し

我らのことも狙っているのです」

64 ジョンは代官を探しました

探す相手はまもなく見つかりました

ジョンは王の印章の包みを開き

代官に手渡しました

65 代官は王の印章を見ると

すぐに帽子を脱いで言いました

「して この手紙を持って参った

修道士はどこにいる」

66 「あの方は身勝手なお方」とリトル・ジョン

「信じ難いとお思いでしょうが

ウエストミンスターの修道院の長さまである

大修道院長になりました」

67 代官はジョンをあつかって

最上のワインを出しました

夜になると床に入り

みんな眠りにつきました

68 ワインとエールをたらふく飲んで

代官が眠りにつくと

ジョンとマッチは二人して

牢獄へと向かいました

69 ジョンが大声をだして

牢番を起こして言いました

「ロビン・フッドが牢破りだ

やつがここから逃げ出したぞ」

70 ジョンの言葉が終わるか終わらぬかのうちに

牢番は飛び起きました

ジョンは隠し持っていた剣を突きつけて
牢番を壁ぎわに追いやりました

71 「さあ これでわしが牢番だ
鍵を渡してもらおうか」
ジョンはロビンのもとに寄り
すぐさまロビンを解き放ちました

72 ジョンはロビンに剣を手渡し
自分の身は自分でお守りをお願いつけて
壁の一番低いところを
飛び越え逃げだしました

73 一番鶏が声をあげ
夜が明けはじめました
代官は殺された牢番を見つめ
召集の鐘を鳴らしました

74 町中に響く大声で叫びました
「ヨーマンだろうが悪党だろうが
ロビン・フッドを連れ戻した者には
褒美をとらせるぞ

75 「このままでは
二度と王の御前へは参られぬ
もしそのようなことをいたせば
この身は即刻吊し首」

76 代官はノッティング中
表通りや路地裏を探しました
しかしその頃ロビンはすでに
この上なく安全なシャーウッドの森の中

77 リトル・ジョンが
ロビンに向かって言いました
「ひどい仕打ちのお礼はちゃんといたした
これにてお暇いただきたい

78 「ひどい仕打ちのお礼はちゃんといたした

信じ難いとお思いでしょうが
お頭をこの緑の森に連れ戻した上は
これにてお暇いただきたい」

79 「それはならん この通り」とロビン・フッド
「断じてならん
今日からお前がわしらの頭
わしも含めた無法者たちの」

80 「それはなりませぬ この通り」とジョン
「それは決してなりませぬ
わしをお仲間とお思いくださるのなら
それだけで十分にござる」

81 リトル・ジョンがロビンを救った
これがうそ偽りなき物語
ロビンの手下たちは皆
頭の無事を喜びました

82 皆ワインに酔いしれて 心ゆくまで喜びました
緑の葉の下で
鹿肉のペーストも存分に味わいました
エールによく合う味でした

83 そのうち王のもとに知らせが届きました
まんまとロビンが逃げうせて
ノッティンガムの代官が
もう二度と王のもとには現れないと

84 すると王が言いました
怒り心頭のご様子でした
「リトル・ジョンが代官を騙した
こともあろうにこのわしまでも

85 「リトル・ジョンが我らを騙した
まんまとこのわしの目を欺きおつて
さもなくばノッティンガムの代官は
あやうく縛り首にするところ

86 「こともあろうにヨーマンの誉れなどと

この手で褒美までつかわした

しかもその上イングランドの国中に

和平の触れまで出したとは

87 「和平の触れだと

口にするのも癢かゆにさわるが

このイングランド中で

やつこそ真ま実ま優れたヨーマンよ

88 「やつは主人に忠実で

聖ヨハネにかけてもよいが

我らのだれに対してよりも

主人ロビンへの愛情をもっておる

89 「ロビン・フッドはどこにいようと

あのリトル・ジョンとは離れられぬ

もうこの件はおさめようぞ

ただ我らがリトル・ジョンに騙だまされただけ」

90 これでロビンと修道士の話は

本当におしまいです

我らが王なる神様

ロビン・フッドに我らの祝福を

(宮原牧子訳)